

民俗

地域の慣習

人の一生には幾つかの儀式がある。中でも冠婚葬祭かんこんそうさいは人生の最大の儀式で、成人式、結婚式、葬式、そして神や祖先を祀るために、古くから家族を始め親族や友人知人が集まって慶びや悲しみを共に分かち合ってきた。こうした気持ちを心に止めるための人々の営みが儀式だと言えよう。

現在、明治、大正、昭和、平成と四世代の人々が生活を共にしているが、時代の移り変わりと共に、社会構造も生活環境も大きく変わり、儀式の方法も簡素化されたり省略されたり、あるいは廃れたものもある。

昔からの習慣や儀式の中には、当時の人々の生活や心の温もりが感じられ、これは地域に根付いた文化遺産である。私たちは先人たちが残してくれたこうした貴重な伝統とその心を大切に継承していきたいものだ。

明治・大正時代の婚姻

結婚適齢期になると親はもとより、近親者たちは嫁ほんそう選びに奔走した。嫁選びに当たっては、本人の意志より家柄や身分・財産・親戚関係・血統・悪い病気の遺伝・娘の性格や健康・素行などが重要視され「嫁貰うなら親見て貰え」ともいわれた。

そのため、事情のよくわかった同じ地区内の知り合いや近親結婚が少なくなかった。

相応の人が見付からない場合は「牛バ見せっ下っせ」「水バ飲ませっ下っせ」などと口実をもうけてさりげなく見に行き、候補者選びをした。当家でも、それに気が付き娘にお茶を持たせたりした。

くちき 口利き

候補が決ったら男方の伯母が娘方の伯母に相談した。うまく運びそうであれば男方の伯父などを仲人を立て、世話役数人が夕暮れにかけ、提ちようちん灯を下げて嫁貰いに通った。

4・5日は普通で、何度も足を運ぶほどがよいとされ、幾晩も膝を立てて相談し、縁談が整うまで膝を崩さなかったという。

樽披露（樽開き）

娘方両親の了解が得られそうな感触を得ると男方の世話役（伯父 叔父）が娘方の世話役（伯父 叔父）の家に「小宿こやど」をお願いして、酒肴や料理を供してことが上手く運ぶようにお力添えをお願いします。小宿には一切負担を掛けないようにする。

娘の両親は簡単には承諾しないのが普通である。「5回も通わした」と言えば、家の箔はくが付くと考えられた。

何度も女方を訪れ、話し合いの上やっと承諾があると、用意してきた樽酒と雌雄の鯛・米1升を差し出し、これを床の間に供え、樽開きとなる。男方が魚料理をして小宴となり、

結婚式の日取りなどを詳細に打ち合わせる。

かつ 担ぎ婚

明治の初頃は、少々乱暴なようだが「嫁かつぎ」とか「嫁御おっとり」の風習もあったそうだ。

縁組みの申入れがうまく進まなくて、親が反対していたり、同時に男2人から申し込まれたり、娘方が貧しくて結婚費用が出せないときや、両親は賛成だが娘が承知しないときなどには「担ぎ」が行なわれた。

また、本人同士は良いが親が反対している場合には、あらかじめ娘の両親との話し合いの上で行なわれた。「担ぎ」の実行者は、男方から娘の近所の顔見知りの青年や親戚の2・3人に依頼したそうである。一方、男方では娘の両親のもとへ媒酌人を立てて、改めて嫁に懇望した。

本人がどうしても承知できない時は、遠い親戚などに身を隠したり、理由をつけて丁重にお断りした。

娘は承諾しても親が反対の場合は、当然、勘当かんとうと言う事になるが、駆け落ちしてでもと云う例はあまりなかったようである。かつぎ婚の式には参列者は普段着のままだったという。

足入れ婚

明治時代は、祝儀を行なう前に娘を男方で生活させる試験結婚的な要素を持つ婚姻形式もあったようだ。

当初は嫌がっていた娘も幾夜か過ぎる内に睦み合うようになったそうである。

かりしゅうげん 仮祝言

樽開きが済んでも祝儀が後に延びる事になれば、邪魔が入ったり破談にならぬとも限らないので仮祝言を上げ、娘はその晩男方で泊まって翌日帰り、以後2人の交際は自由で、両家は親戚づきあいが始まる。

一説には、祝言の費用が出せず人手が欲しくて仮祝言で済ます処もあったということである。

婿入り

花婿は、仲人夫婦・伯父伯母が「樽担いにゃーどん」を伴い、嫁方へ提灯を持って迎えに行く。

お神酒の樽と鯛雌雄を腹合わせに並べて藁で祝結びにしたものを樽担いにゃーどんおうこが杓おうこ（天秤棒）で担ぎ、嫁方に差し出す。

これを床の間に飾り、嫁方でしつらえられた席で「むなつけ」（簡単な食事）を済ませ、花婿は、伯父などの案内人を残して中座し、自宅で嫁方の到着を待つ。

嫁入り

花嫁は「出立の膳」(里での食べ納め)を頂き、先祖の霊にお詣りした後、両親にお礼と別れの挨拶を済ませて家を出る。「再び生家の敷居は跨がない」(離婚はしない)との意味から、玄関ではなく縁から家を出たともいわれた。

花嫁行列は、弓張り提灯を持った案内人・嫁方の伯父伯母・両親・花嫁・添え女・樽い
にゃー・親族、知己友人が続く。

婿方一同は揃って、嫁方ご一行の到着を門道まで出迎える。近隣の見物人は、花嫁姿を一目見ようと人垣ができた。

おちょうめちょう 蝶 雌 蝶

仲人の挨拶があり、雄蝶雌蝶(婿方親戚の少年少女)の酌で親子固めの盃・夫妻固めの盃の後、全員に冷酒と昆布とするめを差し挟み、祝杯が上げられる。

婿方の伯父伯母(叔父叔母)は嫁方の親族へお酌に回り、両家の弥栄とご交誼を結べた喜びのことばを述べる。

わらじさけ つと 草鞋酒・祝い苞

祝宴は延々と数時間にも及ぶ。やおら帰ろうとする嫁方の客は無理に引き戻される。それでも帰る客には、戸口で草鞋酒を飲ませる。

鞋を履く前に一杯、履いて一杯、紐を締めて一杯、締め直させてもう一杯と続く。

帰る客には、藁で拵えた祝苞が渡される。苞には、練り物・煮染め・蟹揚げなどが詰めてある。

こうして、第1日目の本客接待は終わる。第2日目の午前中は、近所の人や若衆(青年)が呼ばれ、午後からは「茶飲み」として女ご衆が接待を受ける。

三日戻り

花嫁は、姑と婿方の伯母(叔母)に連れられて里帰りをする。

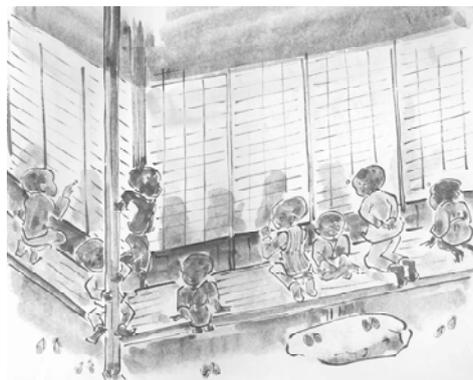
婿方から清酒1升と魚、赤飯2升を堺重に入れ、南天の葉をのせて持参する。

樽開きでお世話になった嫁方の伯父さんたちにも同様の品と重箱に赤飯を贈り、お礼を述べ、幾久しい厚誼をお願いする。嫁方では、御馳走をして歓待する。

現代の婚姻

最近の結婚は、恋愛が主流であるが、お見合いや友人の紹介などで、ある程度の交際期間を経て当人たちで決めている。

また、「出来ちゃった婚」などと揶揄されるように、既成事実が明らかになってから親



の承認を得るケースもある。

仲人なしの結婚もあるが、やはり一般的には、正式に仲人を介して行われている。

結納(樽開き)

縁談が決まれば婚約のしるしとして、結納を取り交わす。

結納の品は、^おちや^おびじ^すえひろ^ゆびわ^ともしらが^こんぶ^するめ^かないきたる
・芽出鯛等に長熨斗を付けたセットがお茶屋などで売られている。

近年では婿方から「結納金」と酒肴を持参し、樽披露の宴を設けている。



結納金は結婚の支度金として月収の2・3倍程度と言われているが、実際にはお返し無しで結納金を収めないケースもあるという。

荷物送り

挙式一週間以内に嫁方の荷物と目録を婿方の新居へ届ける。婿方では、お祝いの膳を用意し、祝宴を開く。

以前は、近所から嫁入り道具を見ようと、見物人が集まったが、最近ではあまり見かけなくなった。

結婚式

戦後まで、結婚式は家庭で行われていた。まず、婿方の仲人、親戚が嫁方へ嫁を迎えに赴き、嫁方の親族を伴って婿方へ迎え、奥座敷で三三九度の盃、夫婦盃、親子固めの盃が交わされた。祝宴は、延々と3日3晩も続いたという。

昭和30年代にはいると、生活改善運動の一環で「公民館結婚式」が流行、式は神前、披露宴を公民館で行っている。

40年代に入ると家庭での結婚式は殆どなくなりホテルなどでの趣向を凝らした結婚式が行われるようになった。

形式としては神前、仏前、教会など宗教形式が一般的である。中には披露宴のみで「人前結婚式」を行うカップルもいる。



最近では結婚式場には神式の式場・美容・写真・引出物・披露宴会場がセットで用意され、料理も和食・洋食・中華など色々な献立を用意しているところもある。形式に拘わらず、夫婦で企画した披露宴も多くなっている。

懐妊

昔は「嫁して3年、子無きは去る」といわれ、周囲からは新婚夫婦に対し初子の誕生を待ちのぞむ声が聞かれ、特に跡取りの男児出生に期待が掛けられた。

妊娠すると、体調が変化し、つわりが始まる。酸っぱい物が欲しくなる・臭いが過敏になる・吐き気があり食事が出来ない・食べ物の好みが変わるなどの自覚症状がある。中には、本人は平気で夫がつわりの症状を起こす事例もあるというが、夫のやさしさが伝わるようでなんと微笑ましい。

新妻の妊娠を知ると、家族や周囲の人々は「初子は男の子がいい」と男児誕生を過度に期待するが、妊婦にとっては、男女の性別などは二の次、第一子誕生の不安と「五体満足に生れてさえくれれば」と祈るような気持ちなのである。

妊婦は精神的に動揺し易いので、つとめて安定を保ち周囲の人々も安心して出産できるよう温かく見守った。

また、「妊婦が火事場を見れば黒子の赤子が生まれる」といい、妊婦には、恐怖心を抱かせないようにと気を遣った。

帯祝い（おびいゑゃー）

懐妊して5ヶ月目の戌の日に、床の間にお神酒、魚、赤飯を三方にのせて供え、里から貰った岩田帯（一丈の木綿で端に紅で「寿」と書いたもの）を締めて、赤ちゃんが順調に育つようにお祈りする。帯を着ける事で母親としての自覚を促す意味もある。

着帯の日は、お産の軽い犬にちなんで戌の日が選ばれ里の両親を呼んで御馳走をした。

※「岩田帯」のいわれが八幡市南東部の岩田に伝わっている。

岩田は綿の産地であった。ある年、京の都から大勢のお供を連れたお姫様の一行が岩田を通りかかった折、お姫様が急に産気づき、近くの野小屋に収穫したばかりの綿を敷き詰めて寝かせ、無事、元気な赤ちゃんが生まれた。岩田の綿が、安産に導いたということから、身ごもった女性が五か月目になると、安産になるようにと、しっかりお腹に巻くようになったという。

安産祈願

出産は家の維持盛衰にも関わる夫婦の大偉業であると同時に、周囲の期待と苦痛を伴う精神的、肉体的な不安要素の大きさから「女の大役」といわれた。あつてはならないが「大役」が「大厄」につながりかねない不安から、やはり神仏のご加護を祈願せずにはいられなかったのである。

生命の誕生は人智の及ばない処もあり「子供はさずかりもの」であるから、人々は神仏に深い願いをこめて安産祈願をする。

お神酒と赤飯を供え、祈願の小旗を掲げたりして「どうぞ良い子が授かりますように、無事にお産ができますように」と夫婦や 姑しゅうとめ、里の母親などが一緒にお詣りをする。

医療技術が進歩した現在、産院任せだから安心だとはいえ、新しい生命が母胎に宿ったことを両親はもとより、家族や親戚縁者が共に喜び、胎児の健やかな発育を願って、安産を祈る気持ちは昔も今も変わりはない。

願^{がんほど}解きには、ヒがあけてから赤ちゃんを連れて氏神様や「子安観音様」に誕生の無事を報告し、御神酒と赤飯や餅を供えてお詣りをする。

性別判断

よく「この子は男バイ」と、妊婦の容姿で男女の性別を占う。男児の時は、妊婦が左腹で突き出ている。妊婦の顔が曇れ厳しくなる。顔色が浅黒くなる。腹の中で胎児の動きが活発である。

その反対の徴候が表れると女児といわれる。乳^{ちばな}離れ児の太腿にできる筋が一つなら男、二つの時は女ともいう。

現在では、病院で性別を知ることができるが、やはり神様の思し召しを待っていたいものである。初めての妊娠で胎動が始まり、母親となったたときの喜びはまた一入^{ひとしお}であろう。

里帰り

昔は、初子のお産は里で行なわれた。気兼ねなく、安心してお産の養生が出来るようにとの周囲の温かい気使いだろう。

婚家では、10ヶ月目に入って日を選び^{いぬ}（戌の日）午前中に姑がお酒と餅か赤飯^{さかいじゅう}を塚^{むら}に詰めて届けた。

里帰りしたら「お産の心^{こころやす} 易かごて、もち出すまで、忠実にせしかえ」（安産できるように産み終えるまで体を動かして仕事に精を出せ）と言ったそうである。

昔のお産

医療設備や技術が進んでいなかった昔のお産は、希^{まれ}に逆子などの難産や流産、死産などで妊婦が命を落とすこともあり、これ即ち「女の大厄」と思う人も少なくなかった。

それだけに、第一子を無事出産した時の喜びは、夫婦にとって例えようがない。

昔は、お産は不浄と言う考え方があり、昭和の初め頃までは産室^{なんど}は納戸と呼ばれる薄暗い部屋であった。

妊婦は、産気づく際^{きわぎわ} 々まで働き、陣痛が近まってから産室へ入り、産婆^{さんば}（助産婦）の手によって取り出される事が多く、多産者で産の軽い人は田畑での仕事や用便中に産気づいてその場で出産する人もあったという。

鶴の助産婦、江崎ヨネさんが取り上げた赤ちゃんも多い。

※ ヨネさんの長男の嫁（ハルさん）も産婆を継いでいる。

明治24年、本渡に梶原産婦人科医院が開業されたが、専ら産婆さんの手に掛かるところが多かった。

明治32年、産婆規則が公布され、試験制になり大正3年、本渡に産婆学校が開設された。助産婦と呼ぶようになったのは昭和13年頃からである。

新しい生命の誕生、これほど感動的なことがあるだろうか。あらゆる生物の中で最も優れた生命体の生誕に献身的に携わってきた産婆や助産婦の陰の功労を忘れてはならない。

赤児は「おぎゃー」と産声を上げるのが普通であるが、気管支に汚物を詰まらせて泣かない児は、逆さにしてお尻を叩いて無理に泣かせたりした。

※昭和30年頃から病院での出産に変わり、現在では無痛分娩や水中出産、音楽を聞かせて胎境を整え、胎児と会話する胎児教育を指導する病院もあり優秀な子供を少なく生んで丈夫に育てる傾向に変わってきた。

お産の現場に男が立ち入るのはタブー視されていたが、最近では、夫もお産に協力したり、励ましてお産の偉業を夫婦共同で分かち合っている光景が見られるようになった。

出産は夫婦協同による大偉業であるから、子育てにも当然、夫の責任が伴うのである。

臍の緒

母親と繋がっている臍の緒を切除処理するのに昔はメスや、^{はさみ}鋏を使わず、竹を研いだ物で切断していたそうである。

臍の緒には生年月日と名前を書いて、大事にタンスにしまって置き、その子が大病をした時、それを煎じて飲ませたという。

医薬品が少なかった時代とはいえ、原始的な医療法である。

臍の緒は、現在では退院時に病院から桐箱に入れて出産記念として渡されている。

産湯

お産が始まれば、夫は産婆を呼びに行き、産湯を沸かした。産湯は、納戸で上盥^{たらい}を使った。^{ちなみ}因に、嫁入りの時は、上盥・下盥・^{ちようず}手水盥を持参した。産湯には「長寿と食べ物に不自由しないように」と、老婆の白髪と五穀を入れた。

名付け

字画による姓名判断を参考にしたりして、男児は強くたくましく育つように願い、女児には優しく可愛らしい名前を付ける。

出生から3日～7日頃までに両親をはじめ祖父母も加わって赤ちゃんに命名し、里の両親^{ほうしよ}らを招いてお祝をする。名前を奉書紙に書いて神棚の下に張る。

※ 命名披露と〈やや見せ〉は赤ちゃんの首が据わったころ、吉日を選んで行われる。

ちけ 血気養生

産後50日間は「^{ちけ}血気病人」といい、母体が平常に戻るまでしっかり養生をする。体の養生だけでなく食養生、気養生が大切で、特に心配事や過度の興奮は産婦の健康を損ね兼

ねない。「^{ちけ}血気が上って^{のぼ}気が狂わした」「養生の悪して弱たれにならした」などという話がよく聞かれたりした。

授乳

昭和初期頃までは母乳が一般的であった。乳の出が不足する母親は、貰い乳をしたり、餅米の粉を砂糖湯で溶いたものとか、重湯の汁や野菜果物の絞り汁を混ぜたものを与えたり、授乳には苦心が多かった。

母乳が不足する母親には「餅や米飴が良か」「ガラカブ オコゼ コチ 鯉などの味噌汁が良か」ともいった。

栄養価が高く、授乳に便利なミルクは重宝であるが、最近ではまた母乳が見直されて来たようである。

昔は、子沢山で生活に余裕はなかったがやはり子供は家の宝として大事に育てられた。

宮参り

赤子が無事に生まれたことを感謝し、健やかな成長を祈って男児は誕生から31日目、女児は33日目に^{うぶすな}産土神社に^{さんけい}参詣するのが本義。ただお参りする日は、天候や赤ちゃんの様子その他によって無理を避け、遅らせることもある。

町内では鈴木神社で^{みやもうで}初宮詣をするのが一般的である。産土神社の他、願掛けをした寺社があればそちらへもお礼のおまいりをする。お神酒・赤飯を持参するのが一般的。

古来宮参りは母親となった女性方（実家側）の行事とされ、産後を実家で過ごした女性が両親とともにお宮参りをし、終わって婚家へ移って祝宴、というのが一般的である。しかし、双方の両親まで打ち揃ってお参りしたり、婚家の側が主体になるケースがあってもおかしくない。

赤児は概ね実家の母親が抱き、お宮参りの着物を肩に掛ける。受けた祝儀袋はその着物の紐などに結びつける。途中で会った人には「赤が元気に育ちますごて、祝うてやって下っせ」と、お神酒を振る舞う。出産祝いを貰った親戚や友人にはお祝いのしるしとして赤飯を届けた。

やや見せ（名付け披露）

首が据わる頃、親戚や友人を招いて、赤ん坊の顔見知りをして貰う。神棚にお神酒、魚、赤飯を供え、頬紅でお化粧をした赤ん坊を、男児は左回り、女児は右回りにして、お招きした全員に抱いて貰う。赤ん坊が家族の一員となったことを親族や近所の人々に紹介して健やかな成長を祝う慶事である

昔はお祝いに清酒1升と米1升を持参するのが慣わしで、「^{うつ}移り」（お返し）には、赤飯や^{うづ}巻きずし・^{がねあ}蟹揚げ・^{わらづと}煮染めを^{ももか}藁苞に入れておみやげにした。

食い初め

平安時代「^{ももか}百日」といって生後百日目の赤ちゃんに餅を食べさせたのが始まりと言われ、

その後餅から魚に替わり鎌倉時代には「真魚始め」と呼ばれるようになったと「平家物語」や「源平盛衰記」に記されている。

本町では百日目に小豆飯やお頭付きの魚を食べさせる^{まね}真似事をする。「食べ物に困らないように」との親の願いが込められた行事である。

節 句

女は3月3日、男は5月5日で、初節句には親戚や友人を招き子供の成長を祝う。

次男、次女からは、家内だけで祝う事が多かったようである。

昭和の中頃までは、門前の広田人形屋（新休横久保）の天草土人形の^{どろ}内裏雛や^{だいらびな}武者人形を贈る習慣が一般的であった。

※「天草土人形」については、第八章伝統文化、第二節民芸品の項をご参照下さい。

現在では、住宅事情や予算にあわせた様々な雛飾りや武者飾りが売られていて時代の移り変わりを感じさせる。

雛祭り

陰暦3月3日は五節句の一つで「^{じょうし}上巳」といい、女の子のお祭りである。

菱形に切った^{よもぎ}蓬餅（ふつもち）や紅白の餅を供え、桃の花や雛人形を飾り、女の子の成長を祝う。娘の初節句には、親戚や友人を招き御馳走をする。

実家には菱形の節句餅に桃の花を添えて贈り、親戚や雛飾りを贈った人たちを招待して御馳走をする。



雛人形の飾り付けは早めでも良いが、片付が遅くなると縁談が遅れるなどという言われかたをしたために、できるだけ早く片付けるようにした。

^{のほり}幟 祝い・端午の節句

五節句の一つで、陰暦5月5日を「端午の節句」といい、男児の祭りとして祝う。

また^{しょうぶ}菖蒲が^{しょうぶ}尚武につながる事から、軒には菖蒲や^{よもぎ}蓬を飾り、子供の頭に菖蒲を巻いたり菖蒲湯に入ったりして無病息災を祈った。

親戚や友人からは名前旗や矢車、鯉幟、吹流し、武者絵幟、^{よろいかいぶと}鎧兜や武者人形の内飾りなどが贈られる。

初節句の家では菖蒲酒、餅、^{ちまき}粽、寒晒し粉で作った団子などを供え、祝いを頂いた親戚や友人を招いて男児の成長を祝う。



平床では、餅米を竹の皮に包み、これを蒸した^{ちまき}粽を作る。菖蒲、^{よもぎ}蓬の他、桑の木を飾るが、菖蒲は刀、桑は弓、トウが立ったよもぎは矢を表していると言われている。また、桑は「くわばら桑原」に通じ、雷避け祈願だという。

寒晒し粉（白玉粉）は、健康食品として解毒作用や整腸効果があるといわれた。またヨモギや菖蒲も薬草として用いられてきた。これも子どもの健やかな成長を願う親心の現れだと言えよう。

誕生祝い・餅踏み

床の間には紅白の鏡餅を供え、里親を招待して「餅踏み」や「子供の将来占い」をする。「餅踏み」は、^み箕に紙を敷き餅を載せ、皆で「よいしょ、よいしょ」の掛け声で赤子に餅を踏ませる。

「這えば立て、立てば歩めの親心」の例えのごとく、家族みんなで子どもの成長を見守っているのである。

「将来占い」は、^み箕の上に筆・^{そろばん}算盤・お金・米・果物・お菓子・物差し・^{はさみ}鋏・糸など七種類の品物を並べ、それを取らせる行事である。「算盤を取ったら商売人、糸を取ったからお裁縫が上手になる」などと言われている。

疳の虫・夜泣き

「疳の虫」といえば夜泣き・^{かんしゃく}癩癧などを指すことが多いが、離乳期前後に多い小児神経症で、原因は神経性素因、肉体・精神の発達のアンバランスなどによるものとされている。精神的にも肉体的にも未発達なため起きる症状で時期が来れば治る場合が多い。東洋医学では小児^{はり}鍼を用いることもある。

「赤子は泣くのが仕事」「泣く子はよく育つ」とはいうが、夜中に泣かれると手の施しようがなく母親までが悲しくなる。疳の虫なのか、オシッコなのか、お腹を減らしているのか、こんな時、経験の多い姑は、よくアヤシ方のコツを心得ている。

^{おしめ}襁褓は洗い晒しの浴衣を解いて出産前から準備した。母親は、「かるうて眠するが手の要らん」といって納所仕事（家事）も野良仕事もキャリア帯で^ね負んぶしたままで仕事をした。

昔は子だくさんで、「年子」と呼ばれるように次々に生んだ。先に生まれた^{かんぢー}兄弟は、第二子・第三子が生まれると、母乳が貰えないでよく泣いた。そんな赤子を「干乳」と呼んだ。干乳には早くから^{かゆ}お粥や果汁などの離乳食が与えられた。

通過儀礼

^{ひちと}紐解き

3歳になった年の11月15日は「ひもとき」といって、紐の付いた着物から「三身」の着物に替えて帯を締めさせる行事である。親戚からは帯が贈られる。

後に、七五三の行事として引き継がれている。

七五三

1月15日、男児は3歳と5歳、女児は3歳と7歳になった年に、新調した着物や洋服を着せ、氏神さまや鈴木さまに参詣して子供の成長と健康を祈願する行事である。

子どもは、お祝いの品や千歳飴を貰い、記念写真を撮ったり祝宴をする。

本来は数え年の行事であるが、近年は満年齢ですること多くなっているようだ。

立志式

昔、男子が数え年15歳で元服式を行ったことに因んだ行事で、最近では2月の節分のころに学校行事として取り組んでいるようだ。

論語の「子曰、吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而从心所欲、不踰矩。」の「吾十有五而志于学」にもとづく。数え年15歳は中学校2年生であることから、自分自身の将来に向かってどのように生きるか、そのために今、何をしなければならないか、何ができるのかを考える機会にして欲しいとの願いがある。

成人式

通過儀礼（イニシエーション）の一つで、成人を祝う儀礼として古くからある。

男子は12歳から16歳ぐらいになると、成人となった証として、成人の装束を身にまとい髪を結び、冠をかぶる元服という儀式が行われた。このときに幼名を廃して烏帽子をつけた。また、貴人の子息の場合は、この際に位が、授けられた。室町中期以後になると、身分の高い人の他は前髪を剃ったり袖を短くするなど、さまざまな形式の儀式が行われた。女子には裳着・結髪などがある。現在では、満20歳になると、法律上でも責任ある一人前の成人として扱われ、成人となったことを社会から公認される。

1948年に公布・施行された祝日法によると「大人になったことを自覚し、みずから生きぬこうとする青年を祝い励ます」という趣旨から各地で成人に達した人達を祝う式典が催され、翌年から1月15日を成人の日として制定した。

この日は、神社でも成人祭が行われ、神さまに成人奉告をする姿が見受けられる。

厄入り・厄払い

慶雲3年（706）文武天皇の世に疫病がはやり、疫気を祓ったのが追儺の行事の始まりであるとされており、厄払い節分祭として続いているという。

男子は数えの25歳と42歳、女子は数えの19歳と33歳が大厄といわれている。体力的にも社会環境や家庭環境の転機を迎える年回りだといえる。

厄入り同窓会を催したりして、お互いの安全と無病息災を祈願して神社でお祓いを受ける。厄入りは家族や友人で祝って貰い、厄払いには無事に厄を逃れたお礼とお返しを込めて当人が祝宴を催してお客を接待するのが一般的である。

結婚記念日

日本では夫婦としての絆より「家」を重視したため結婚記念日を祝うという感覚はないが、銀婚式や金婚式などでは、旅行をしたり子供や孫が宴を開いてくれる傾向がある。最近、本渡市では金婚夫婦を祝い地方紙や広報に名前を掲載して記念品を贈っている。

還 曆

還曆かんれきとは、本卦還ほんけがえりともいい、干支えと（十干十二支）が一巡して、起算点となった年の干支にふたたび戻ること、数え年61歳（満60歳）を指す。



還曆は、元服、婚礼と並ぶ人生における三大祝儀の一つに数えられ、家父長制の強かった封建時代の名残である。家長は数え年の61歳になると、家督を後継者に譲り、引退するのがしきたりであった。したがって還曆は単なる長寿のお祝いというよりも、その家の家系が代々続き、家業が繁栄することを願う儀式としての性格が強かったと言われている。

還曆の祝いでは、本人に赤色の衣服ずきん（頭巾やちゃんちゃんこ）などを贈る。かつては魔除けの意味で産着うぶぎに赤色が使われていたため、再び生まれた時に帰るという意味でこの習慣がある。

※ 論語、為政には「六十而耳いせい 順みみしたがう」とある。「修養ますます進み、聞く所、すべてが理にかなない、何らの障害なく理解しうる」つまり、人の言うことを逆らわないで聴けるようになったという意味で「耳順」を六十歳を意味することばとして使われている。

古 稀

古稀こき（古希）は70歳のことで、唐の詩人杜甫の曲江詩「人生七十古来稀ナリ」に由来するという。

かつては70歳まで生きるのは希まれであったことから、長寿の祝いとされている。

※論語の七十而従心所欲不踰矩は、「70にして心の欲する所にほつ 従したが ひて矩のりを踰こえず」

つまり、70歳で心の欲するままに任せても限度を超えなくなった」というのによる。

喜 寿 数え年77歳の祝いで、喜の略字が七十七と読めることから目出度い数ちなに因んで祝賀が催されている

傘 寿 傘の字が縦書き数字の八十に見えることから、80歳を祝う祝賀である。

米 寿 米の字を分解すると88になることから米寿と名付け長寿を祝う。

※ 88歳のお婆ちゃんが八十八夜あやかの日に摘んだお茶を飲めば長寿に 肖れるといわれている。

卒 寿 卒の略字〈傘〉が九十に見えることから、90歳の祝いのことをいう。

白 寿 百から一を引くと白になることから99歳の祝いを白寿という。

ひやくじゆ 百 寿 数え年の百歳で、^{ももじゆ}百 寿・^{ももが}百 賀・^{きじゆ}紀 寿・^{じようじゆ}上 寿などの呼び名もある。文字通り百歳のお祝いである。

※ 60歳を下寿、80歳を中寿、百歳を上寿という。紀寿祝いの「紀」は一世紀のことである。

「あなた百まで、わしゃ99まで、共に^{しらが}白髪の生えるまで」 近年、百歳を超えた長寿者が多くなったが、夫婦が共に健康で長生きできることを願わずには居られない。

「長寿と幸福への道」(百三歳のある老人のエッセイより)

「人生50年」とは昔のことで今は七70・80は働き盛りでござる。常に心を丸く、腹を立てず、気を長くすべし。口慎めば命ながらえる。

60歳にして^{えんま}閻魔様の使いがお迎えに来たら「まだまだ^{はなた}湊垂れ小僧で浮き世で修行の身ゆえまだ行かぬ」と申せ70歳にしてお迎えが来たら「今旅行中で留守だ」と言って追い返せ。80歳にしてお迎えが来たら「まだ早い」と言え。90歳にしてお迎えが来たら「そんなに急くな」と申せ。

百歳にして迎えに来たらわざわざ迎えに来てくれなくても時期を見てこちらから伺う」と申せ。

葬 送

^{よちょう}予 兆

予兆とはこれから起こるであろう異変や不吉な予感・暗示のような感覚である。無常がある時は身近な人に何らかの予兆があると言われている。夢見の悪さやカラスの鳴き声、火の玉などがそれである。

「田植の夢や人が大勢集まっている夢を見ると一家 ^{いっけ}(親類)や地域内に無常がある」

「カラスが集まって悲しそうな声で鳴く」

「死の直前に死人の家から青白い火玉が飛ぶのを見た」

※ 出征兵士が戦死した時などに「家族が自宅の屋根に火の玉を見た直後に戦死の訃報が届いた」と言う話をよく聞いた。

^{まつこ}末期の水

「末期の水」の由来はお釈迦様が伝導の旅の途中体調の異変に気づかれ弟子が川の水を汲んで釈尊に差し上げた。此の水を飲まれたのが此世の最後飲食物であり最後の供養であったということから臨終に際し水を差し上げる真似をしたものである。

身近な人が脱脂綿やガーゼに水を含ませ、口元に浸してやる。

遺体の処置

○死体を奇麗に拭き、^{びこう}鼻腔や肛門などに脱脂綿を詰める。

○死者の死体硬直が始まる前に、手を胸もとに合唱させる。

○座敷の仏壇の前に北枕、西向きに寝かせ、顔には三角の白布を被せ、上から羽織りを逆さに掛ける。

○死者の枕もとに小机を置き、止観花（酢和え花）・生花一輪・線香一本・山盛り飯1膳に1本箸を立てて供える。

かみらさ 神塞ぎ

死者がでたら、その家の神棚に白紙や扇子を逆様にして立て、不浄よけのため、忌あけまで神々に覆をする。



むじょうこう 無常講

講役人(2人)が地区の家々へ無常を伝え、無常講として集めた金を葬家へ届ける。

※ 金額は地区によって百円から三百円程度である。昔は米一升だったという。

無常講は余儀ない突然の出費にたいして隣邦（隣組）が支え合った慣習の名残だと思われる。

にんそく 寺人足

若者（必ず2人）で無常米1升を頭陀袋に入れて持参し、寺に到来（臨終）を届ける。

お寺では、到来の知らせを受けると、鐘を1つだけ突く。

とき 夜伽（通夜）

通夜のことを〈伽〉、〈夜伽〉、〈添い寝〉〈目覚まし〉ともいい、故人と親しかった人たちが一晩中故人に付き添い、葬儀の前夜の別れを惜しむ儀式である。菩提寺の僧侶による枕経の読経があり、弔問客は合掌して焼香をする。

一家（親族）や隣人 知人 友人が弔問に訪れ、親族からは粉俵一俵（最近では花輪か生花）
・ 伽見舞・米1升・大豆・茶菓子果物・蠟燭・線香など上られる。一般の人は伽見舞（目覚まし）
・ 米1升・線香・果物などを上げてお詣りする。

夜伽に行くことを「物言いに行く」とか「ことばに行く」というが、「夜の長うござすど」「寂しゅうあんなすどばって」というような慰めのことばをかけて、別れを惜しむ。

一家内（親族）は夜を通して故人を偲びながら、お酒を出したり、蠟燭や線香を絶やさないようにして不寝番をする。

最近では通夜には一般の弔問客を迎え、午後六時から遅くとも午後10時位には終わりにすることが殆どである。

昔は「猫は魔物だから死人を跳越すと死人が立ち上がる」と言われ、猫を隔離した。

葬儀の打ち合わせ

区長や公役人と呼ばれる世話役が、寺人^{にんそく}足・墓掘り・花造り・棺桶^{かんおけたまや}・霊屋造り・買物など加勢人の中から役割を決める。葬儀の当日は、1軒から男女2人が加勢に出る。

葬家では医師の「死亡診断書」を添え、役所に「死亡届け」を提出し、「埋葬許可書」を取る。

湯灌^{ゆかん}

伽の翌朝、お悔やみ客が来ない内に子供や兄弟の身内が湯灌をする。座敷の畳をはいで盥^{たらい}を置き、柄杓^{ひしゃく}は逆手で持ち、敷き水を入れ、次にお湯を入れる。(日常の作法とはすべて逆に行う風習がある)剃髪をする。(女も)髭は逆剃りにして、線香1束が消えるまでに行なう。頭髪や髭は白紙に包んで納棺の際中に入れる。

死者の洗い浄めは女の人が行なう。不浄物は人目にふれないように処理する。

湯灌^{ゆかん}が済んだら白い着物で縫い止めや返し縫いをしないで仕立てたものを左前にして着せ、帯^{たてむす}びは縦結びにする。(作法上、左前や縦結びを忌み嫌うのはこのためである)

白の足袋^{てっこうきやはん}・手甲脚絆を履かせ、白の三角巾を額に付ける。

納棺

棺の底に無情^{ごさ}莫蔭を敷き、死者^{すわ}を据らせ、血脈^{けちみやく}を持たせる。頭陀袋^{づだ}の中に賽銭六円を入れて首に掛け、手は合掌して数珠^{じゆず}を掛ける。数珠は親玉を叩きつぶして持たせる。供えていた枕飯も持たせる。

子供には玩具、酒好きにはお酒など、それぞれ死者の嗜好品や愛用していた物を入れる。紙袋に粉殻を詰めた「糠枕^{ぬか}」や花柴・生花などで死者を固定する。出棺までは釘を打たない。友引きの日の葬式には藁人形を添える。

出膳^{でぜん}(別れ膳)

新仏^{にいぼとけ}に出膳を供え、別れ膳をする。最も身近な人、即ち夫であれば妻、親であれば後継ぎが新仏に向かい合って最後の相伴^{しょうばん}をする。

墓掘り(土葬のみ)

「墓掘ッドン」(若者が4・5人)が朝から、幅1^沓深さ2^沓の墓穴を掘る。

墓穴の用意が出来上がったら、魔避けに古い卒塔婆^{そとば}二本を穴の上に渡し、「シメ切り」の十字形をつくり、そこに使った鍬や唐鍬を掛け、埋葬に備える。

「墓掘ッドン」には、大きな丸い握り飯と酒を届けた。

棺場^{かんば}(男衆は葬儀に必要な道具を用意する)

○組内の大工が霊屋^{たまや}・棺桶^{かんおけ}・位牌(2)・卒塔婆(7本)を作る。棺桶を運ぶ輿^{こし}は、組内に備え付けがある。

霊屋は、破風屋根で頂上に鵬^{おおとり}を配し、屋根の四隅には燕^{つばめ}を止まらせる。

四壁には紫の布を巻き、蓮の模様を切り抜いた「彫り紙」を下げる。天蓋にも彫り紙を設える。

○大旗2本・小旗2本・花籠2本・龍頭2本・天蓋1本・点灯2本・六道邁6本・(杖には藁草履をつける)1本などの竹材を用意する。

※六道とは、仏教で死後の世界で、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・極楽道(天上道)がある。

○苞火 線香の束を藁で作った苞に包み、出棺の時、焼香する。

○花造り 金紙・銀紙・色紙を使って彫刻を施し菊・蓮・アヤメ・止観花(酢和え花)などを作る。

蓮とアヤメの花台には米団子、その他の花にはお菓子を入れておく。(黄泉路の弁当代りと云われている)

小学生が花持ち役で、ダゴは会葬者に配る。死者が高齢の場合は、肖かれるように、ダゴの貰い手が多い。

現在は、こうした道具を作れる技術者がいなくなったので、ほとんど仏具店で用意している。

葬儀用具の買物

金紙18枚・銀紙5・大奉書紙4・奉書紙赤4・黄4・緑15・白紙80・障子紙10・七色紙30・バレン紙大4小4・梅造り用赤布1尺・白1尺・旗用の布(青黄緑白)各4尺・龍頭(2本)・赤布各2尺・天蓋用赤布4尺・晒2反・絞り幕(子供、若者用は派手めの柄物・老人用は金襴・紫・青の柄物)6尺・無常数珠(死者に持たせる)

食品(寒のり30枚・昆布2尺・寒天赤10本・干瓢20匁・砂糖5^キ・高野豆腐50枚)

講役人こうやくにんやせしかい人(調理員)が買物にあたる。

野辺たち(出立ち)

会葬者には全員にお膳を出す。「隣の〇〇さんの家が出立ち宿ですけん、召上がって行って下っせ」と案内する。弔われる死者との別れ膳となる。

加勢人かせいにも食事が出る。葬式に参列できない老人には、送り膳が届けられる。葬家には〈出立ち宿〉から食事が運ばれる。

精進料理(煮染め・白和え・酢和え・巻糰子・お壁(豆腐)・菜漬け・沢庵・味噌汁)等が出される。

悔やみに米や線香を持参した人には、丼一杯の握り飯を葉欄等に包んで移り(おかえし)をやる。

葬儀・葬式

通夜や葬儀は一般的には自宅で行われている。

仏式の葬儀は、菩提寺の住職により引導・法号（^{かいみょう}戒名）が^{とな}唱えられ、僧侶による読経が行なわれる。参列者は、喪服を着用し、数珠を掛合掌して香を手向ける。

出棺

葬儀が終わると、亡骸の周りを花卉で埋め尽くし、身内が棺に一度ずつ釘を打つ。

棺は3度回って縁側から^{こし}輿に載せられる。その際、直ちに^{こし}箒を逆手に持って、座敷を掃き出す。

棺は、跡継ぎから^{しろむく}順じ近親者が交代で担ぎ、輿には晒しの紐を付け、身近な女性だけが持つ。紐を持つ女性は白無垢の着物に綿帽子を冠った。

地区の男衆は、^{つとび}藁で苞火を用意し、^{こしら}棺場で^{たすさ}拵えた葬具一式を携え、葬列に加わる。

葬列の順序

^{つとび}苞火（長老が持つ）・^{つえ}六道の杖・^{かご}大旗・^{たつがしら}小旗・^{ことほし}花籠・^{ひつき}龍頭・^{こし}点灯・^{てんがい}花持ち・僧侶・^{わら}打敷き・女性会葬者・^{しかんぼな}遺影・位牌（孫息子）・^{しん}止観花・身内の女性・^{こしら}棺の輿・^{あんのん}天蓋・杖と藁草履・^{ごくらく}親戚の男衆・一般会葬者の順。

※六道杖（^{がき}地獄道、^{しゅら}餓鬼道、^{ごくらく}畜生道、^{ごくらく}修羅道、^{ごくらく}人間道、^{ごくらく}極楽道）は墓所までの道中に立てる。

一人の僧侶が付き添い、道中、お経を唱えながら葬列に加わり、墓所では^{はかぎょう}墓経を上げる。

土葬

墓地は、一般的に閑静な^{かんせい}小高い丘の上にある。死者の魂が、残した家族の^{あんのん}安穏を見守るためだという。

亡骸は、24時間経過後に、墓地に2メートル程の穴を掘り、土葬された。

^{かんおけ}棺桶に^{あさひも}麻紐を付けて西向きにして墓穴へ納め、身内が土をかける。墓掘りドンが埋葬作業にあたる。紙類は墓に入れ、竹類は焼き捨てられる。

打敷きと布類は寺へ上げ、杖・^{わらぞうり}藁草履・^{そとば}卒塔婆は^{たまや}霊屋の後ろに突き立てて置く。

墓まるめ

葬送が終わった翌日、親類で墓穴の上を土搗きをして、土台を固め、^{たまや}霊屋を据えて板壁や開き戸・段飾りなどを造り、位牌を安置する。

水の^{はつほ}初穂・花瓶・^{ろうそく}線香・^{ろうそく}蠟燭立てを設置する。

寺詣り

葬式の翌日、親類が揃って僧侶への御布施・^{うちし}打敷きや布、米1升・野菜・線香を持参してお詣りをする。

精進

死者が出たらその家族は精進に入る。

○この間は魚類などの生臭物は食べない。

○鳥居をくぐったり、神々への参詣さんけいをしない。

○村祭りの役目は辞退し親戚や近所けいじの慶事の出席を遠慮する。

○家内の結婚式や赤ん坊の名付け誕生祝いは延期し、正月飾りや節句も取り止める。

○農作業の加勢の御馳走はせず、カチャリ（労働交換）でも精進者には別あつらえの精進料理しょうじんを出した。

会葬お礼

喪主もしゆは、葬儀の参列者にお礼を延べる。葬儀社が用意した礼状に粗品を添えるのが通例である。近年、新生活運動を進めている町では礼状だけの所もある。

清め塩

葬儀から帰宅したら塩で清めていたが、今日ではその習慣も薄れつつある。

※ 塩を清めに用いるのは、例えば葬儀の際会葬者に配られる清め塩・大相撲で力士が土俵上まで撒く塩・料理店などの店先の盛り塩にも同様に清めの意味があると言われている。

人の死は、身内や親しかった人にとっては深い悲しみであり、心痛に耐えない出来事わざわいごと（禍事）である。自らの暗い心や観念を払拭して平常心に立ち返りたいと望むのは自然なことであり、清めの意味は、死者に対するものというよりむしろ自らの心に起因するものであるということができよう。

力士の清め塩のことを考えてみても、具体的な穢れけがを祓うという意味より自らの心象面での清め、すなわち土俵上でプレッシャーに負けず、怪我がなく冷静な判断で充実した相撲を取りたいと願う気持ちの発露であるということができる。

初七日

親類で法事をする。その後、卒塔婆と水の子（米と大根・人参・蓮がらを細かく切った物）をまいって墓詣りをする。最近では葬式の翌日に初七日と精進上げまで済ませるところが多くなった。

命日法要

初七日・フタ七日・ミ七日・ヨ七日・三十五日・ム七日・四十九日までの満中陰まんちゅういん迄は、毎日朝晩灯明を点し、線香を薫じて拝み、お墓詣りには卒塔婆を立てる。

7日7日の速夜たいやには、寺から読経に来てもらう。

アタリ日（命日）には僧侶や参拝者にお齋膳いつきぜんを出す。

中陰は3ヶ月に亘ってはならないとされ、その時は35日で忌明けをする。

四十九日

前日の逮夜には身内が集まって準備に掛かり、命日の早朝から加勢人が来て法事の準備をする。煮染めなどの料理は広蓋に設え、肴鉢に平盛りにする。親族は米・野菜・御仏前・線香などを持ってお詣りする。

四九日の餅（15センチ大の塩餡）を搗き、菩提寺には小餅50ケを届ける。数についてはいろいろな説があるが49ケは餓鬼の分、残りの1ケは新仏（死者）の分という。親族や近所には6ケとか8ケ（偶数）を配る。

法要では僧侶による読経の後、「四九日迄の法要で満中陰（忌明け）となり、新仏の霊も立派に成仏なさいまして冥土へ旅立れる」といった法話の後参拝者と一緒に膳に着く。

※ 昔は忌明けまでは家族全員が精進料理を食べ喪に服した。

精進料理の献立は（ヒラ（三角に切った厚揚げ）・ガネ揚げ・羊羹・寒天・イギリス巻寿司・煮染・白和え・酢和え・キンピラ・うどん・樫の実コンニャク・胡麻豆腐・ヒローズ・昆布巻き・ユバ巻き・山いものトロロ汁）

親戚や茶のみ客にはウツリには堺重には巻寿司を入れ、藁苞（仏事用は藁の先端を内側に入れ込む）の中には、ヒラ・大根・人参・牛蒡・里芋・芭蕉の根・蓮根・ガネ揚げ・羊羹・寒天・イギリス・結び昆布などを入れる。

精進明け

神棚を覆っていた扇子や白紙を取り除き、花（神櫛）を供え、御供さまを上げる。毎朝の拝礼を再開する。

床の間の段飾りを撤廃し、位牌を仏壇に移し、親類や加勢を受けた人たちと共に酒肴で精進上げをする。これで49日間の精進生活を終え、普段の生活に戻る。

一周忌

死亡した翌年の祥月命日を1周忌と云い、僧侶にお経を上げて貰い、親類縁者を招いて法要を行なう。

三年忌

死後満2年目に3年忌（3回忌）の法要を行なう。親類や関係の深い人だけを招く。

初盆

初盆には、迎え火を炊き、初精霊様を迎える。親戚友人知人を招き法要を行ない、全員で会食をする。

親戚からは、当家の家紋を入れた盆提灯を贈る。盆の16日には、墓地で棚提灯を飾り、精霊舟を流して霊を送る。

年忌

百ケ日・1周忌・3年忌・7年忌・13年忌・17年忌・25年忌・33年忌・50年忌を営む。

50年忌で埋骨（遺骨を土に還す）する。故人は自然に還り土になるといわれている。これらの年忌には、僧侶にお経を上げて貰い、親類中が集まって法要を行なう。新仏壇の購入や石塔上げは13年忌以降の年忌に行われることが一般的である。

現代の葬送

土葬による埋葬から、昭和四十五年、火葬場が建設されてからは、もっぱら火葬が一般的になった。

ライフスタイルも個人生活重視に変化し、慣習やしきたりに拘らなくなったため、儀式は合理的に簡略化されつつある。

かつては大半の家庭が通夜から葬式までを自宅で営んでいたが近年では部屋の家具移動や後片付けなどを考慮し、葬儀社を利用して葬儀一切を委託している家庭もある。

命日や法要も、休日など生活者の都合で日時を変更しているのが現状で、初七日や精進明けなども遠来の弔問客や親類に配慮して葬儀の翌日に行う傾向がある。

年中行事

近年、社会環境の変化や価値観の多様化によって古来から守り伝えられた慣習や年中行事も次第に廃れたり忘れ去られようとしている。

昔は、3世代同居の大家族の中で親たちが昔からの言伝えや習慣を守り伝え、それが子々孫々へと受け継がれてきた。そこには、家族の強い絆きずなと人々のぬくもりがあった。しかし、残念ながら現在では、家族構成の変化や合理的な生活習慣によって、こうした人々の営みや豊かな情操を育む土壌が失われつつある。

元 旦

一月一日の「元旦」には、国旗を立てて年の始めを祝う。年内に神様を迎えるための準備はすべて終わり、心静かに新年を迎える。神仏にご神酒やお節、雑煮を供え、家族でそれを頂いて家運隆盛と家族の健康を祈る。

目出度い元旦は幸運を掃き出さないように、掃除はしない慣わしならもある。

若水汲み

早朝、家の主が湧水わきみずを汲み、神前へ供え、お湯を沸かして家族で頂く。このお茶を頂くと病気をしないとされている。

初 詣（初参り）

初詣とは、新年初めて寺社に参拝し、一年の無事と平安を祈る行事である。

元来は「年籠り」と言い、祈願のために大晦日の夜から元日の朝にかけて氏神に籠る習慣であった。やがて年籠りは、大晦日の夜の「除夜詣」と元日の朝の「元日詣」の二つに分かれ、この元日詣が今日の初詣の原形となった。現在でも除夜に一度寺や氏神に参拝して一旦家に帰り元旦になって再び参拝している。氏神・崇拜神社・寺と三社詣でが一般的となっている。

参拝の仕方は、先ず手水を使い手と口を清め、御神酒を供え、賽銭を上げて鈴を鳴らし、二回拝礼して、二回拍手、そして一回拝礼する。

本町には天草の守護神で鈴木三公を祀る鈴木神社があり、初詣には各地から参拝者が訪れる。氏神さまである下河内神社、掛道神社、新休神社、本村神社など神社巡りをしながら、お互いに新年の挨拶を交わす。

正月三ケ日までには親戚、友人、勤務先などへ年始の御挨拶に廻るのがしきたりである。元旦の年始詣り客には、お節や雑煮を供し、屠蘇を汲み交わす。

昭和初期頃までは男の子は凧上げ、独楽回し、竹馬ペったで遊び、女の子は羽根突き、鞠突き、カル取り等をして遊んだものだが、今は室内でTVゲームなどで遊ぶ子供が多くなった。

お年玉

元来、神に供えるために紙に包んだ洗米のことを「年魂」といった。後に、お年寄りが丸餅を子供に与え、これを「力餅」とか「年玉」と言ったのが始まりで、現在では、お金を与えるのが一般的である。

春祈祷

新春を迎えた家々のお祓い、家内安全、五穀豊穰を祈る地区行事である。

床の間に天照皇大神宮の掛け軸を飾り米・餅・御神酒・魚・塩・野菜・果物を供える。

昭和三十年代まで神官さんに家ごと全戸回ってもらっていたが、徐々に地区ごとにまとめて行うようになり、現在では九地区、七日間で行うようになってる。

地域の神社で春祈祷神事を行う場合は地区の宮総代が参列して神札や御幣、シデなどを受けて帰り、待ち受けた地区の人々に頒布する。地区公民館などで行う場合は全員が参列し、神札や御幣、シデなどを個々に頂いて帰る。当人さんたちには、辻辻に注連縄（とうさん）や御幣を立てる仕事がある。いずれにしても春祈祷には「地区の新年祝賀の集い」といった側面もあるので、和気藹々とした直会となる。

引地・平・前原の三地区では昔、神官さんが家々を回っていたころの方式を一部とり入れるようになったという。

七草粥（七草雑炊）

陰暦正月7日は7日正月と呼ばれ、五節句の一つで人日と言って春の七草や餅を入れた雑炊を食べて無病息災を祈る。最近では、食料品店やスーパーでも「七草粥セット」が

売られている。

※春の七草は食べて楽しむ



せり、なすな

、ごぎょう、はこべら
ほとけのざ、すずな（かぶ）すずしろ（大根）

つな 綱打ち

昭和30年頃までは正月7日、各戸より藁を持ち寄り綱より機で「綱打ち」をして牛の引き綱を作る。綱打ちが終わると新綱を床の間に飾り神に御神酒や魚を供える。本年の豊作とお互いの健康を祈願してご馳走を食べ、酒を酌み交して祝った。

おねんぼ(鬼火焼き・左義長)

1月7日、田圃や安全な場所に川竹で櫓やぐらを組んで、夕方から火が付けられる。子供たちは数日前から、おねんぼに使う川竹を運んで準備をし、門松や注連飾りなどの正月飾りを焼却する。

子供は、書初めで書いた習字を火にかざす。空高く舞い上がると習字が上達すると言われている。

おき燗かきができた頃、正月飾りの鏡餅かみもちを竹に挟んで焼いて食べる。青竹に清酒を入れ、燗かきをつけた「カッポ酒」を飲むと病気をしないとされている。餅焼き竹は、持ち帰り、本家畑もとえに立てておくと、魔避けになるとされている。



笹をあぶり、頭や体を撫で乍ら「事故あに遭わんごて、病気せんごて、頭ン痛うならんごて、腹ン痛うならんごて、腰ン痛うならんごて、悪病はみんな焼切り申せ、焼切り申せ」と唱えながら、その笹を火に焼べ、無病息災を祈願する。

また、笹を牛に食べさせると、牛が病気しないとされる。

しょうき ご正 忌さま

1月9日から1週間、浄土真宗の行事で、親鸞聖人の命日でお寺では法会が行なわれる。

僧侶の説教（法話）を聞き、先祖さまを供養する。

なれなれ

昔は、1月15日は「小正月」といって、仕事を休んだ。小正月の行事に「なれなれ」がある。早朝、子供が大声で「なれなれ柿の木、なるなら立てとこ、ならんならイチ切っぞー。又五郎キンタマドンの鞆ツツ玉タマンゴてぶらりぶらっとさ〜が〜れ」と「なれの木」で、木の幹を叩く。「なれん棒」は、春最も早く芽をふく「猫柳」が縁起のよい木とされ、木肌も美しいのでこの木が使われる。



50掬位の「なれん棒」と、神棚に飾る20掬位の「花ん棒」とがあるが、これらは、木の表面を薄く削って、ゼンマイ状にしたものである。

柳田国男の『民俗学辞典』によれば、「紙が普及する以前は、御幣として用いられ、それが小正月の飾りとして残ったものだ」という。

また、一説では、男性の性器の象徴化したものとも言われ、新妻の尻を叩いて、懐妊祈願をするところもあると言う。

樹木にカツ（刺激）を与え、潜虫を殺す効果があると言われているが、近年栽培技術の向上や果樹の増量もあり、このような風習も見られなくなった。

ねはんえ 涅槃会

2月15日は、お釈迦さまが、お亡くなりになられた日である。お寺では、お釈迦さまが涅槃に入られたありさまを描いた大きな掛軸をかけ、報恩の法要を行う。



二十三夜さま（三夜様・三夜待ち）

正、5、9月の23日夜、輪番で座元になって、月の出を拝み健康を祈願しました。庶民の知恵から困窮者同士の資金カンパの方法として「頼母子講たのもしこう」を開いていた。

気心の知れた隣近所ふしんや親戚友人が十数人集まり、講元は酒肴や料理を提供して掛金を徴収していた。家普請とか不意の出費でお金を入用とする人が、講金を落す。

頼母子講りんぼうは隣邦の仲間うちでお金を融通しあう一種の相互扶助的な金融組織のことであるが、余裕のある者が遅番に回って講仲を支え、戦前まで庶民生活に大きな役割を果たしてきた。しかし、時代の変動や金融の発達すたなどから次第に廃れてきた。

はつうま 初午

2月最初の午の日に行なう稲荷神社の祭りで、田の神様を迎える時期に当たり、農耕ほうじょうの神である稲荷信仰とが結び付いてお祭が行なわれるようになったようである。五穀豊穰、子孫繁栄を祈る。

せつぶん ま 節分 豆蒔き

昔、鞍馬山の鬼に三三石三斗の豆を投げ付けて追い払ったという伝説があり、夜、年男が大声で「鬼は外、福は内」と云い乍ら、炒った大豆を蒔く厄 病払いの行事である。

自分の年齢の数の豆を食べ「まめに暮らせるように」と祈る。

ひな祭り

陰暦3月3日は五節句の一つで「上巳」と云い、女の子のお祭りである。

春の彼岸

彼岸は年に2回あり、春分の日（3月21日頃）と秋分の日（9月23日頃）をはさんだ前後一週間指し、彼岸の初日を「彼岸の入り」春分、秋分の日を「彼岸の中日」、最後の日を「彼岸明け」という。

現世を「此岸」と言うのに対し、仏の世界を「彼岸」と云い、彼岸（浄土）は日没の方角（西）にあるとされ、日没がその方向を正しく示す。

この時期、寺では「彼岸会」の法要が営まれ、祖霊が往生を遂げますようにと供養する。また、「暑さ寒さも彼岸まで」といわれ、農作業や植え付け、収穫の目安とした。

彼岸とは、迷いの世界から悟の世界へ至る教えで、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の六つの教えを実行すれば、幸福になることができると示されている。

お彼岸の前日には、仏壇のお掃除、仏具の手入れをして、お花をかえる。花は櫛がらつうである。

だいっ お大師さま

彼岸には、弘法大師を祭る「お大師さま」がある。

弘法大師は、空海の諡号で、真言宗の開祖である。

みろくよ 弥勒世

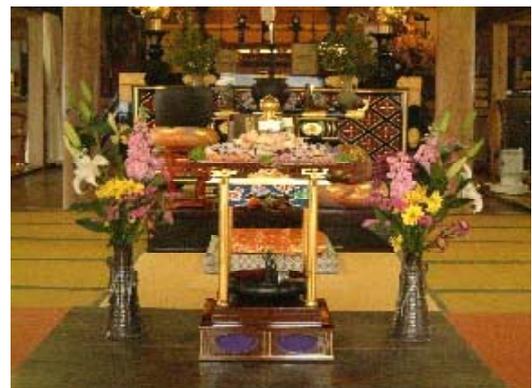
陰暦3月6日、寺領の迦葉寺では壇家が集まり、和尚の読経と説教の後、会食をする。

迦葉寺からは弥勒様の護符を頂き、苗代田の四隅に竹を立て護符をつけて虫避けと豊作祈願をした。

お釈迦さま（花まつり）

4月8日はお釈迦さまの生誕の日で、釈尊誕生会と称し、全国的に実施されている行事である。

教典に「お釈迦さまは菩提樹の下で誕生され、八大竜王が甘露の雨を降らせ産湯を使わせた」との伝説があり、東向寺では、蓮華の花などで飾った花御



堂が設^{しつ}えられて釈迦像をお祀りする。子供たちはお賽^{さいせん}錢と瓶を持ってお寺に詣り「南無釈迦無尼仏」を唱えながら釈迦像に甘茶を注ぐ。

甘茶は、小瓶に分けて頂いて家に持ち帰り、仏壇に供える。この日のため寺では、早くから甘茶の葉を加工したり、甘茶を煎じて参拝者へ接待している。

甘茶は、ユキノシタ科の落葉低木で、ガクアジサイの変種とされ、これを頂くと病気をしなないと云われる。また、百足が侵入しないようにと甘茶をふり掛けて^{まじない} 呪 をしたりする。



八十八夜

立春から数えて88日目で、霜の害が少なくなる農作業の目安で、この日に摘んだお茶を飲めば、寿命が延びると言われている。

88歳の婆ちゃんが88夜の日^に摘んだお茶は「長寿にあやかれる」と言って特に貴重とされている。

昔は一家総出でお茶摘みをして、平釜で煎っては、熱い茶の葉を^{むしろ} 筵の上で揉み付けて、気長に煎り上げる。家族が一年中飲むお茶であるから家族総出で仕上げたものである。

今では、本町農協の製茶工場で加工販売され、地元以外からも多くの生茶が持ち込まれている。

端午の節句・^{たんご} 幟^{せっく} 祝い^{のほり}

五節句の一つで、陰暦5月5日を「端午の節句」と云い、男児の祭りとして祝う。

母の日（5月第2日曜日）

近年、西洋の習慣が移入されたもので、母親の日頃の労苦をねぎらい、感謝してカーネーションなどを贈る。

さなぼり（早苗振 早苗餐）

平安時代の武将、斎藤実盛^{さねもり}が戦いの途中稲株に^{つまづ} 躓いたところを敵に^{おそ} 襲われ、虫に化身したという伝説から虫神送りの神事として「サネモリ」が「サナボリ」となったのであろうという説もある。

田植終了には豊穰を祈願して竈荒神様に田苗3束を供える。

御馳走を食べ、ヤイト（お灸）をしたりして、鋭気を養ったが、最近では田植機械の導入でさほど労力を必要としなくなりこうした習慣も少なくなった。

はげ節句

^{はんげしょう} 半夏生は、夏至から数えて11日目で、田植も済んでちょっと一服する時期で「はげ節句」といい、この入梅頃^{つゆ}に降る大雨を「はげ水」といった。

はげ節句には、「はげ団子^{たご}」を供えて祝った。だごは、唯一のごっつお（ご馳走）であった。

※ だごは、小麦粉にふくらし粉（重曹）を入れ水で捏ね、餡^{あん}を入れて丸め、カッカラ（サルトリイバラ）の葉を敷き蒸す。

農家にとっては、束の間の農休日、この時期に灸をすえたりして体作り（体調を整え）をした。

※ 巳の日は「身を焼く」といってお灸を避けた。

この日、朝寝坊すれば「ハゲナツゾ」（禿げになるよ）と脅されたものである。

七夕

陰暦7月7日を七夕と言い五節句の一つで、この頃は天の川伝説にあるように星空が美しい季節になり、早朝から里芋の葉などから朝露^{つゆ}を集めて墨^すを摺り「書道が上達しますように」「家族が健康で幸せが訪れますように」などと願い事を書いた短冊や千代紙で作った飾りを竹笹に吊す。竹竿は物干し竿に使った。

虫追い（むしえ）

水稻の病虫害を追い払い、豊作を祈願する行事で、古くから注連縄^{しめなわ}を張りこの地に災いや悪い病気が入らないように、村界や里界の辻々に辻御幣が立てられる。

昔から平床・福岡・鶴地区では、虫追い太鼓を打ち鳴らし、村中を練り歩いたが、戦後途絶えていた。

昭和45年頃、福岡地区で虫追い太鼓を復活。また本町青年団も町内行事を始め各種イベントや青年祭などで、勇壮なバチさばきを披露している。

土用丑の日・ウナギ

小暑から立秋までの最も暑い時期で、夏バテしないように鰻^{うなぎ}を食べる習慣がある。

お中元

昔、中国の道教信仰に基づく三元の一つで、上元（1月15日）中元（7月15日）下元（10月15日）を満月の祭として祝った。

昔から商家では、盆・暮れは決算期でこの時期にはお得意さまに日頃のお礼の品を贈っていた。

また、農家では、その年の新穀を収めて祝う〈八朔礼^{はっさく}〉や仏教の盂蘭盆^{うらぼん}と結び付き一般の人にも先祖を供養し生存の無事を祝って贈物をする〈盆礼^{ぼんでい}〉の風習として広まり、定着したようである。

今では交際範囲の拡大に伴い、お歳暮同様日頃お世話になっている方へのお礼の贈物と

して盛んになった。

地藏盆（豆接待）^{せつちやー}

梶の原では、陰暦7月24日の地藏盆の日に、子供の成長を祝い、家内安全、無病息災を祈願して豆接待をする。

昔は、子供数人が鐘を打ち鳴らして「詣ってください」と豆接待を知らせて回っていた。豆を食べる子供は頭が良くなると言って、炒った堅い空豆をたくさん食べたものである。噛むことで脳の働きを良くするというが、最近では硬い物を噛むのが苦手な子供が増えている。

十五夜

陰暦では七月が初秋、8月が中秋、9月は晩秋で、お月見は「中秋の名月」と言われ、8月15日頃の月が最も美しいとされている。「十五夜」「名月」^{もちつき}「望月」^{つきこよい}「月今宵」^{いも}「芋名月」などと呼ばれている。



新芋や果物、団子など満月のように丸い物を三方に供える。月と同じ丸い物を食べる事で、平和で健康と幸せがもたらされると云う考え方であろう。

キキョウ カルカヤ オミナエシなど秋の七草を飾り、お神酒を供えて豊作に感謝する。

※秋の七草は見て楽しむ植物

萩^{すずき}・薄^{くず}（尾花）・葛^{なでしこ}・撫子^{おみなえし}・女郎花^{ふじはかま}・藤袴^{ききょう}・桔梗



各戸から藁を集めて大綱を練り、綱引きをしたり、綱で土俵を造り、敷き藁の上で子供たちに相撲をとらせる。

藁集めやチボ作りが子供たちの仕事で、藁のない家庭からは賞品代としてお金上がり、子供会長が学用品などを買って賞品に当てている。

なお、十五夜の翌日の月は「十六夜」、十七夜の月を「居待ち月」、十八夜の月を「立ち待ち月」、十九夜の月を「寝待ち月」などと、月の出の時間が次第に遅くなってゆく様を巧みに捉えたネーミングである。

お盆（盂蘭盆会）

盆は中元に先祖の霊を迎え、供物を供えてお詣りする盂蘭盆会の略である。お盆の供養には、二つの意味がある。一つは「仏さまを敬う」「ご先祖さまを尊ぶ」という、ご先祖さまや亡くなった人のための供養。一つは、お世話になったすべ

ての人やものに感謝する、生きている人（父母、親族など）や

ものへの供養である。

釈迦の弟子の目蓮が、死んだ母が苦しんでいるのを救おうとして、釈迦に教えを請い、祭った事に始まると言われている。

お墓掃除をして先祖にお参りし、仏壇には寒晒し粉で作った「鼻だご」や「舌だご」・落雁を供え 縁側には提灯を灯して精霊さまを迎える。初盆の家には親類が先方の家紋を入れた提灯を贈り、素麺、線香、蝋燭、御供物などを持ってお参りする。

里を離れて暮らしている家族や親類縁者が集まって先祖の精霊を供養し、お墓参りをして一族で御馳走を食べる。

正月と共に親族が集まり、一族の無事を確かめ合う機会でもある訳である。昔は、陰暦7月15日に行なわれていたが、最近、8月に行なわれるようになった。

精霊流し

精霊さまを送るお盆の行事で、初盆の家では15日の夕方、〈西方丸〉と書いた精霊舟を詠え、盆中祖霊に供えてあったお供物を精霊舟に積み込み提灯を飾って川や海に流す。

昔は麦わらで舟を造っていたが、最近では既製品を売ってあり、海まで精霊流しに行く家もある。しかしこれも海の保全という環境問題の絡みで変化を余儀なくされている。

藪入り

昔は「盆の16日は地獄の釜の蓋も開く」と言われ、仕事を休み、ご婦人や奉公人が里帰りを許された。

また、この日に働く者には「ヒュージ（怠け者）の盆働き」と罵られ、日頃から段取りよく仕事をしたものである。

施餓鬼会（施食会）

施餓鬼会とは仏教で、飢えに苦しんでいる餓鬼（成仏出来ないで迷っている死者）に食を施すことによって餓鬼達を苦しみから救い、その功德が私達のご先祖様に向けられるよう多くの僧侶とともに供養する法要である。

曹洞宗では施すものを象徴的に「食」と表現し、すべてのものに施す「施食会」と言う

名称が適当であるということで施餓鬼会の名称を変更している。

東向寺では施食会歓行が催行され、先祖の追善供養や説教師の法話の後、庫裡（住職の居間・台所）では先祖様とともに信徒が昼食の施しを受ける。

昔、普門院では、子どもの頃、鬼が舌を抜く姿や釜茹での絵け軸の絵を見せて「嘘言ったり悪こっすればこぎゃんなとぞ」と脅された怖い思い出がある。

※ 施食会に飾る掛け軸（写真）－平床の矢筈観音さまの祭りに展示される



秋の彼岸ごもり

秋の彼岸は、秋分の日（彼岸の中日＝9月23日頃）をはさんだ前後1週間を指す。最後の日を「彼岸明け」と云う

寺では、先祖の供養や説教があり、壇家がお詣りをする。また、仏壇には春は「牡丹餅」、秋は「お萩」を供える。

戸の原の地蔵さまでは、お握りや煮染めを接待して、健康祈願をする。

※ 季節の花にちなんで春は「牡丹餅」、秋は「お萩」という呼びかたをする。

昔は「この頃になると河童が川から山へ上り、クロギソウの木に宿るから、子供は一人で山へ入るな」といった。

亥の子

陰暦10月の第一亥の日は仕事を休み、「亥の子餅」を搗いて神様に供え、家内安全と繁栄を祈願した。亥の子餅は嫁の里にも届けた。

神待ち

10月は、全国の神様が出雲の国へお集まりになるので、村々の神が不在と言うことで「神無月」と呼ばれている。

陰暦10月29日、この日は出雲の国から神々が帰ってこられる日で、各地で深夜まで酒を飲み交わしながら、お籠りをするのが慣わしになっていた。

山ん神さま

各地に山の神を祭ってあるが祭り方や供え物にも違いがあり興味深い。

※「民間信仰・神」の「山ノ神まつり」を参照下さい。

お歳暮

日頃お世話になっている人へ感謝して品物を贈る風習で、盆前のお中元と同じく社会的な贈答儀礼の一つである。

冬至

一年中で最も昼が短い日で12月22日頃である。柚子湯ゆずゆに入る風習がある。体が暖まって風邪を引かないという。また、「冬至カボチャ」を食べると中風とうじにならないといわれている。カボチャにはカロチンやビタミンを多く含有し食べ物の少なかった時代には、栄養補給に欠かせない食べ物だったようである。

すす 煤払い

正月を迎えるために部屋の大掃除を行なう。昔は燃料として薪や柴を使用したので天井が煤すすで汚れた。これを笹竹ぼうきではたき、箒はで掃き、雑巾で拭いた。

餅搗き

28日か30日に餅を搗く。臼に入れた蒸し米を杵で搗く。29日は「二重苦」とか「苦持ち」になると言って忌み嫌。

花餅

小さく千切った餅を、木の小枝に花状に附着させ、「花餅」を作り、もみひつ 糰子に飾る。初雷が鳴ったら、それを炒って食べると落雷を免れると言われている。

門松

年神様よりしろの依代だいたいとして、門前の両側に松・竹・梅・鶴の葉（ユズリハ）・ヘゴ（ウラジロ）・しつら 橙で設えた門松を立てたのが始まりで、26日から28日ごろまでに飾る。

一時期、新生活運動や簡素化が叫ばれ、印刷物が玄関に貼られていたが近年、また復活している。

しめ 注連飾り

しめ縄は、不浄な物と隔たるためのものと言われ、玄関・神棚へ飾り正月を迎える。

神代の時代、天照大神が天の岩戸からお出になった後、岩戸に縄を張り再び中に入れぬようにした。この縄は「尻久米縄」と云われたと古事記に記され、しめなわの始まりとされている。

さわぎ（幸木）

玄関を入った土間の天井に、7尺5寸3分（2・28祀）に切った檜木（平床では松）

を吊るし、それに毎年12本（閏^{うるうどし}年は13本）の縄を垂らし、普段使用する農機具（鋤^{くわ}・鎌^{かま}）と鶴の葉（ユズリハ）・へご（ウラジロ）昆布^{だいだい}・大根・橙・魚類をくくりつけて飾る。

農機具に感謝し五穀豊^{ほうじょう}穰と家内安全を祈願する。

近年では農機具も機械化され、さわ木を飾る家も見かけなくなった。

おせち料理

正月は多忙な主婦の休養の為に、日持ちの良い料理をつくったのが始まりだと言われている。

料理の品には家族繁栄や健康祈願など縁起を担ぐ意味が含まれており、母親の家族を思う心がこめられている。例えば、昆布は「慶^{えんぎ}ぶ」、かすのこは「子孫繁栄」、豆は「まめに達者で働くように」、海老は「腰が曲がるまで長寿でありますように、」するめは「喧嘩^{こころ}するめ工」という語呂合わせが面白い。

最近では、おせち料理も料理店・仕出し屋・通販などで求める傾向がある。

おおみそか 大晦日

一年の最後の日で借金払いや正月準備も済み、静かに新年を迎える。来る年も幸せが訪れるようにと夜遅くまで雨戸を開いたままにしておく。

大晦日には年越しそばを食べる習慣があるが、そばの様に細く長く、腰が強く丈夫で、長生きするようにとの願いが込められている。お寺へお供え物を届け、お墓にも松竹梅などの花をあげて、ご先祖の供養をする。

除夜の鐘は、六^{ろくこん}根から起こるといわれる百八の煩^{ぼんのう}悩（迷い心）を除くために打ち鳴らすといわれている。

一年を反省し、清らかな身心を整えて年を越す心がけこそが大切なことである。

東向寺境内では、篝^{かがりび}火が焚かれ、除夜の鐘を撞くために、大勢の人々が訪れる。

※ 六根とは人間の持つ六つの生命の感覚器官で眼・耳・鼻・舌・身・意のことである
煩悩とは仏教の教義の一つで、心や体を悩ますすべての迷いや欲望のことである。

